

エズス会宣教師も関与する貿易活動による利益の二つでまかなわれていた。

まず、イエズス会が日本で布教活動をするには、どれほどの経費を要したのか見てみよう。ヴァリニャーノの『日本巡察記』から、予算の主な用途が次のようなものであったことがわかる。

我等（イエズス会員）、同宿、教会の世話をする人々、及び我等の修院で必要とする下僕を合わせ、吾人は毎年五百名前後を扶養している。これらの者がいづれも一カ所で生活するとしても、その経費は莫大であろう。我等は各地での経験により、これよりもはるかに人数が少ない学院一カ所においても、毎年一万、あるいは一万二千クルサードではほとんど生活してゆけないことを知っている。

さらに、修院や教会等の建築費、教会の装飾品の購入費、物資の輸送や宣教師の旅費、領主等への贈物、迫害を受けた者や貧者への施しなどが必要であった。その経費を国王・教皇からの資金援助と、自らの貿易活動によってまかなおうとしたのであるが、資金援助はどれぐらいあったのであろうか。

ポルトガル国王は布教保護権の制度に基づき、キリシタン教会の保護者としてこれの財政面の責任を負う立場にあった。ところが同国王が日本イエズス会に支給した年金は、高瀬弘一郎氏の研究によると、次の通りである。国王は一五七四年まではマラッカにおいて毎年六〇〇バルダオ（約五〇〇ドゥカド）を支給してきたが、この年に一〇〇ドゥカドに増額した。スペイン国王フェリペ二世がポルトガルを併合した際に、ゴアにおいて同じく一〇〇ドゥカドの年金を追加支給することにした。また、ローマからの援助は一五八三年以後四〇〇ドゥカドの年金がマドリッドにおいて支給され、一五八五年に一回だけこれが六〇〇ドゥカドに増額されたが、その後はまたこれが四〇〇ドゥカドに戻された。この支給状態や送金も確実ではなかった。

つまり、遣欧使節の大きな目的の一つであった国王や教皇からの資金援助要請は、成功したとはいえないのである。

それでは、もう一つの資金供給源である貿易はどうであったのだろうか。

従来、遣欧使節のことについて語るとき、宣教師の経済活動とは切り離して考えるきらいがあった。そのため、遣欧使節が美化された。あたかも神に導かれてローマに赴いたかのごとき言説まであらわれた。その原因の一つには、神に仕える神聖な宗教活動と、現世の利益を求める経済活動とを切り離して考えてしまっていたことによる。神父たちが必要に迫られてならなくともかく、必要以上に貿易で利益を得ることに對する違和感のようなものがあつたのか、遣欧使節を論じる際にも、宗教的・文化的側面が強調されてきた。

日本におけるキリスト教布教は、スペイン・ポルトガル両国が海外に進出した大航海時代の所産であることを忘れてはならない。両国が、積極的に勢力拡大を競った大航海時代に、カトリック布教活動も海を越えて世界に広がった。両国の国力を離れて、海外布教はありえないし、また両国の海外発展も、教会の精神的權威を後ろ盾にしたものであり、しかもそれがローマ教皇の權威によって正当化されていた。

つまり、遣欧使節が実現されたのも、大航海時代の所産である。ザビエルやヴァリニャーノといった宣教師たちが日本で活動できたのも、スペイン・ポルトガルの勢力が日本にまで及んできたからにほかならない。両国の影響力がなければカトリック布教は不可能であり、日本での布教活動を、宗教的な視点からのみ理解しようとするなら、それは不十分といわねばならない。宣教師たちは、スペインやポルトガルの国家事業の一つとして日本布教を行ったのである。遣欧使節もその一つとして考えなければならぬ。

そう考えると、今まであまり注目されてこなかった「世俗的な救済策」が、いかに重要であるかがわかるであろう。日本への布教

が、イエズス会だけの事業ではなく、大航海時代を現出させた両国の国家事業と関係していると解釈すれば、国王・教皇は、布教を保護・支援する義務があり、ヴァリニャーノは日本におけるその成果を披露するために、少年たちをローマに派遣した。そして、さらなる資金援助の約束を取り付けようとしたのは当然のことであった。

また、スペイン・ポルトガルの貿易活動にイエズス会が参加し、自分たちの活動資金を得ることも、完全に否定されるべきものではなかったのである。布教と貿易とは密接に関係しているのである。よって、かれらが、貿易についていかに考えるかということは、単に貿易や商業活動についてばかりでなく、布教政策そのものについてどう考えるかということにつながるものであった。

宣教師たちの中には、大きく分けて、二つの見解があった。一つは、イエズス会創立の精神を堅持して、修道士として清貧を貫くという考え方である。もう一つは、日本の現状に即して臨機応変に考慮し、方針を決定するという考え方である。

ヴァリニャーノは後者の考えであった。ヴァリニャーノは、遣欧使節が日本に帰国するに際して、イエズス会総会長に、次のような書簡を書き送っている。

日本キリスト教界と当市の利益のために今年行わなければならないことは、生糸を積まずに船を日本に送り、その船で私が日本の貴人たちと一緒に、副王が関白殿に送る書状と進物を持つていくことであり、いまひとつは、当市が別の人物を関白殿の許に送って次のように通告することである。すなわち、今年は例年のように生糸を送ることはしない。それは閣下がポルトガル人に無法を働き、パードレたちに迫害を加え、教会を破壊し、生糸を望みのままの価格で買い取り他に売ることを許さなかったからである。もしも閣下が従来どおりポルトガル人が生糸その他の商品をもって渡来することを望むなら、再びパードレたちに日本滞在与教会建設を許可しなければならぬ。と

いうのは、ポルトガル人はキリスト教徒であり、パードレと教会なしには生きてゆけないからである。さらにポルトガル人が従前どおり誰にでも売りたい相手に生糸を売ることができるよう彼らに自由を与えなければならぬ。このことを通告するためと副王が送った書状と進物とを届けるためにのみ今年本船が渡来したのであって、もしも閣下が以上の要求事項を履行しなかつたら、もうこれ以上日本に渡来しないつもりである、と。このように通告すれば関白殿が折れてくることは確かであろう。このナウ船が日本に行かなければ多大な利益と名誉とを彼が失うからであり、また日本中が決起して、彼の悪口を言い立てるからである。

ここで書かれている「生糸を望みのままの価格で買い取り、他に売ることを許さなかつた」とは、豊臣秀吉が、一五八八(天正一六)年夏、長崎にポルトガル船が渡来した際、小西行長の父小西立佐に二〇万クルサド以上の金を持たせて長崎に派遣し、権力を背景に九〇〇ピコにも上る生糸を優先的に、不当な安値で買い占めさせたことを指している。この九〇〇ピコという生糸量は、通常ポルトガル人が例年日本にもたらした生糸量から判断して、おそらく積載していた生糸のほとんどであると言われている。

これは、従来の長崎貿易の慣行を破る全く異例のものであり、そのことは当然マカオ側にも大きな動揺を与えた。秀吉に対し、ヴァリニャーノが「もしも閣下が従来どおりポルトガル人が生糸その他の商品をもって渡来することを望むなら、再びパードレたちに日本滞在与教会建設を許可しなければならぬ」と述べており、貿易と布教とは一体であることを強く認識していることがわかる。自分たちを安全に日本に上陸させ、教会を存続させなければ、貿易をやめるといふ一種の恫喝にも似た主張がなされている。

ヴァリニャーノは、日本での布教活動を通して、慢性的な資金不足に悩み、経費をまかなうために、「今後は、日本において収入を

増加させるか、この貿易を大いに拡大するか、あるいは日本での仕事をやめるか、そのいずれかが必要である」と結論づけ、「膨大な費用をまかなう方法としては、イエズス会には毎年支那から来る船による貿易以外にはない」と断言する。

日本イエズス会の貿易は多岐にわたったが、その主要な部分はマカオ・日本間の生糸貿易であった。これは、マカオを基地にして、中国産の生糸を日本に輸入するポルトガル人の貿易活動に参加する形で行われた。しかし宣教師が貿易に従事するのは、問題があると考える者もいた。

日本布教長を務めたカブラルは、イエズス会総会長あての書簡で、次のように述べている。

日本の改宗事業のために必要であるとの口実の下に、われわれが少しづつ足を踏み出し、純粹に必要あって、極めて慎重かつ細心に始めたことが、必要というより、むしろ貪欲さから行われるようになること、つまり修道士にふさわしい程度をこえて恣に行われるようになるのを非常に恐れる。というのは、すでに今年、何人かのパードレが、個人でもって、貧者のためとか教会を修繕するためとか言って、二〇ピコ、一〇ピコと生糸を入手した。この生糸は直ちにその地で転売されたが、このようなことも非常に悪いことだと思われた。また何人かのパードレは、これと同じ口実で、少額ながらこの地で投資するために金を送ってきた。もしも初期のうちに防いでおかないと、これが嵩じて非常に悪事を働くものも出てこよう。

また、カブラルは同じ書簡の中で

教会の門をくぐって人々はミサにあずかるが、同時にその傍らの門から生糸や綿織物の梱が運び込まれ、良心問題やその他の霊的な事柄のために来た人々が、中国の財貨や商品が、プロクラドル立会いの下に梱にされているのを目撃する、というようなことがたびたび起っているからである。このようなこと

は、現在の管区長（ヴァリニャーノ）から多くの許可と権能を得て行われているので、カーザ内に慎みを欠く空気を作り出し、その上、少なからず非教化の原因にもなっている

と、ヴァリニャーノの貿易推進策を批判している。長崎の教会内部で、堂々と貿易品の梱包作業が行われていたのである。これを見た信者たちがどう思うだろうか、清貧を旨とした教会ではありえない光景であると、カブラルは嘆いている。

カブラルだけではない。マカオからもイエズス会総会長あてに、イエズス会の貿易に深く関与する様を批判する書簡が届いた。

現在は、人員やカーザの数が増えたので、経費は増しはしたが、必需品や日常の衣食に事欠くようなことはないと思はう。もっともそれは、巡察師が贈る進物が今ほどでなければ、の話である。この進物によって、彼はその名にふさわしい地位にあるということを示している。もっとも日本の領主たちは、贈り物を受け取る資格をそなえてはいるが。しかし、日本に対しては、すべてが少ないと巡察師は考えている。それならば、そのためにイエズス会の信用と評判を落とすよりは、それを削減したり、やめたりするほうが正しいと思われる。

（イエズス会の）評判は、この貿易によって失われつつあり、しかもそれはますます甚だしくなっていくであろう。そして貿易によって資産を増やしたいという欲望がわれわれに嵩じてゆくことであろう。

先ほど述べたように、貿易についていかに考えるかということ、布教政策をどう考えるかにつながっていた。貿易については賛否両論あったが、布教活動資金を日本で賄おうという姿勢は希薄であった。彼らは日本国内で資金を調達することに、全く期待していなかったのかもしれないが、国王や教皇からの寄付にしろ、生糸貿易にしろ、遭難や略奪により、いつ援助が途絶えるかわからないものに頼らざるを得なかったことが、この時代にキリスト教が日本に